

# 江戸時代の古文書の魅力

## ―暮らしを探る―

Yamagata Takashi

山形 隆司

奈良教育大学社会科教育講座

# 江戸時代の古文書の魅力

## －暮らしを探る－

奈良教育大学 社会科教育講座 山形 隆司

### はじめに

皆さんは、「古文書」って知っていますか？これは「こぶんしょ」ではなく、「こもんじょ」と読みます。本来、古文書は昔の人が書いたもので、手紙や証文のように、ある人からある人へ差し出されたものを指します。ただ、一般的には昔の人が書いた日記などの記録類も古文書と呼ばれることがあります。

古文書は、それが書かれた時代に生きていた人々の暮らしを垣間見ることができる、とてもとてもおもしろいものです。それが証拠に、カルチャーセンターや博物館などで催される古文書講座はいつも大盛況です。ただ、とても参加者の年齢層が高くて、平均すると70歳くらいでしょうか。これからは、若い人にもぜひ古文書の魅力を知ってもらいたいと思います。そこで、今回は江戸時代に書かれたものを例にとって紹介していきます。

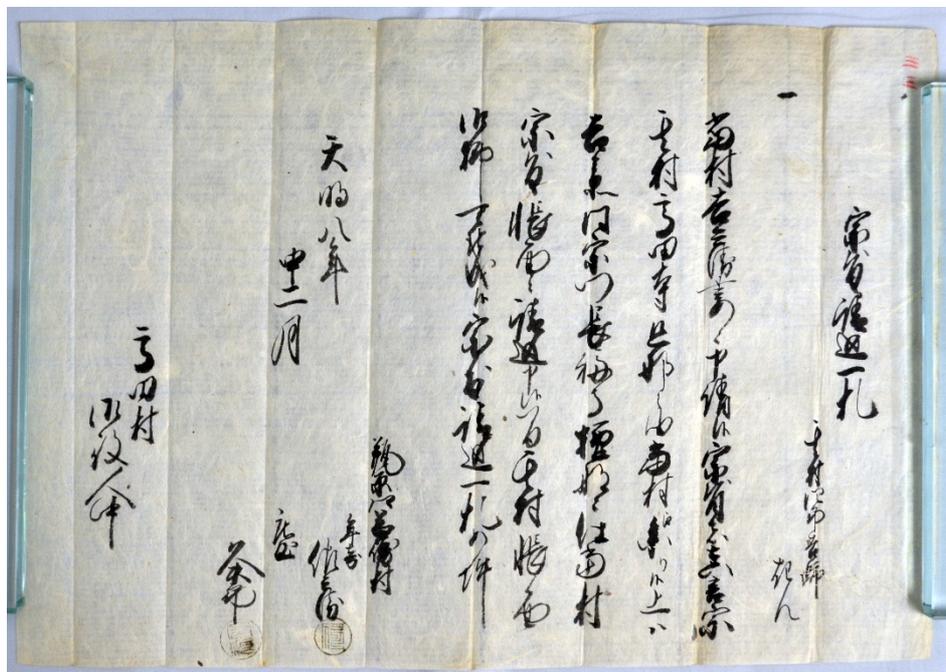
### 1. 江戸時代の古文書

江戸時代の古文書は、その多くが青蓮院流（御家流）という書体（くずし字）で書かれています。この書体は、全国的に普及したため、この書体で書かれた文字の読み方を一通りマスターすれば、どの地方の古文書も大概は読むことができます。ただ、現在の我々はくずしていない楷書の文字に慣れているため、読むのが難しいと感じます。

また江戸時代の古文書は、漢字が多くて漢文のように見えます。それは送り仮名がほとんどなく、その上、当て字が多く使われるせいです。「うらやましき」を「浦山敷」と書いたり、「むつかしき」を「六ヶ敷」と書いたりします。これ

らは単に「羨<sup>うらや</sup>ましい」とか「難しい」という意味なのですが、このように書かれると難しいですね。また副詞や助詞、接続詞もたいてい漢字で書かれます。若(もし)、嘸(さぞ)、併(しかし)など、現在では読むのが難しいかもしれません。

しかし、これらを乗り越えると、江戸時代の古文書に出てくる文言は日本語なので、何となく意味が分かったりします。読めるようになると、とてもおもしろいものですよ。では、前置きはこれくらいにして、実際の江戸時代の古文書がどのようなものか見ていきましょう。写真の下に、「くずし字」を活字にしたものを掲げました。



奈良教育大学日本史研究室所蔵「山城国相楽郡村々文書」No.66

宗旨請込一札	其村四郎吉姉	きん
一、		
当村吉兵衛妻ニ申請候、宗旨は真言宗		
其村高田寺旦那之由、当村江参り候上ハ		
吉兵衛同宗門長福寺檀那ニ仕、当村		
宗旨帳面ニ請込申候間、其村帳面		
御払可被成候、宗旨請込一札、如件		
天明八年	瓶原郷岡崎村	
申二月	年寄	
	佐兵衛	
	庄屋	
	久米郎	
高田村		
御役人中		

## 2. 江戸時代の婚姻手続き

ここで紹介する古文書は、天明8年(1788)に作成されたもので、<sup>みかのほら</sup>瓶原郷の岡崎村の庄屋・年寄(村役人)から高田村の村役人へ出されたものです。瓶原郷は、岡崎村近辺の9カ村を指す総称です。ここは、奈良時代に恭仁宮が置かれていた場所です。この文書が作成された江戸時代には、全国に約6万以上の村があり、それぞれが幕府や藩などの支配の末端に位置付けられていました。岡崎村は禁裏御領(皇室領)、高田村は津藩領でした。岡崎村も高田村も京都府木津川市の市域にあたります(『加茂町史』第2巻近世編〔加茂町、1991年〕参照)。

この文書は、文中に「当村吉兵衛妻ニ<sup>もうしうけ</sup>申請」とあるように、岡崎村の「吉兵衛」が高田村の「きん」を妻に<sup>めと</sup>娶った際に、作成されたものです。現在でも、結婚すると役所で新しく戸籍を作ったり、住民票を移したりする手続きをしますが、江戸時代にも同様の手続きが行われました。

ただ、現在と大きく違うのは、個人の身元保証に寺院が深くかかわっていたことです。皆さんは、学校で江戸時代にはキリスト教が禁止されていたと習ったと思います。これを徹底するために幕府や藩は「宗門改め」を行い、住民がキリスト教徒でないことを地元の寺院に証明させたのです。

これは住民側からすると、キリスト教徒でないことを証明してくれる寺院が必要となる事態が生じたと言えます。こうして、江戸時代にはすべての住民が身元を保証してくれる<sup>だんなでら</sup>「檀那寺」を持ち、住民は<sup>だんか</sup>「檀家」として檀那寺を社会的・経済的に支える義務を負いました。また檀那寺の主導のもとで、葬儀をはじめとする仏教行事が営まれ、住民の日常生活の中に浸透しました。

このような経緯で、宗門改めに際し作成された「宗門人別改帳」には、村や町の住民すべての名前が書き記されました。そして、そこに地元の寺院が、自分の檀家がキリスト教徒ではないことを証明するために判子を押しました。江戸時代も中期になると、キリスト教徒の摘発はほとんど無くなりますが、「宗門人別改帳」は多くの地域で毎年作成され、現在の戸籍に近い役割を果たすようになったのです。

再び、古文書を見ますと、高田村から岡崎村へ嫁に来た「きん」について、「宗旨は真言宗、其村高田寺旦那」、つまり高田村にある真言宗の高田寺の檀

家であることが記されています。その後の文章の「当村江参り候上ハ吉兵衛同宗門長福寺檀那ニ仕」とあるのは、「きん」は当村つまり岡崎村へ嫁入りに来たので、吉兵衛と同じく長福寺（浄土宗）の檀家になるという意味です。「きん」の檀那寺は、結婚により高田寺から長福寺へと変化したのです。

江戸時代においても、「<sup>はんだんか</sup>半檀家」といって結婚後も元の檀那寺をそのまま継続する例も見られますが、多くの場合は結婚と同時に嫁ぎ先の檀那寺の檀家となるのが通例でした。

また同時に、村ごとに作成される宗門人別改帳の記載も修正する必要があります。すなわち岡崎村の宗門人別改帳に「きん」の名前を加え、逆に高田村の宗門人別改帳から「きん」の名前を削除する必要が生じます。文中で「当村（岡崎村）宗旨帳面ニ<sup>うけこみ</sup>請込申候間、其村（高田村）帳面<sup>おほらい</sup>御払可被成候」とあるのが、これにあたります。「宗旨帳面」とあるのは、「宗門人別改帳」のことで、「請込」は加筆、「御払」は削除を表しています。

以上のように江戸時代には、寺院は宗教施設であるとともに行政の一端を担っていたと言えるのです。このように、住民の身元保証を寺院が行う仕組みは「寺請制度」と呼ばれており、人々の信仰心の形骸化を招いた側面や僧侶の世俗化を招いた側面とともに、これによって仏教がより広い階層に生活に根差した形で浸透した側面も指摘されています。

### 3. 現代社会とのつながり

今日、日本における寺院数は約7万6千カ寺あると言われます（『宗教関連統計に関する資料集』〔文化庁文化庁宗務課、2015年〕）。これは、コンビニエンスストアの約5万5千店を上回るものです（「JFA コンビニエンスストア統計調査月報」〔日本フランチャイズチェーン協会、2017年2月〕）。

この原因は、寺請制度が導入された江戸時代の初期に、新たに寺院が創建され、村や町のお堂や道場であったものが寺院に格上げした結果、大幅に寺院が増加したためであると言われます。

また、明治政府により寺請制度は廃止されましたが、30年位前まではお葬式に際して、檀那寺のお坊さんを招いて自宅で葬儀を営む姿が普通に見られました。今日では、お葬式は地域にある葬儀会館などで営まれることも多くな

り、急速に檀那寺と檀家との関係も希薄になってきているように感じられますが、つい最近まで江戸時代以来の檀那寺と檀家との関係が継続していたと見ることも出来ます。このような意味において、現在は寺院と我々との関係が大きく変化しつつある時期であるのかもしれませんが。

## おわりに

今回は、婚姻の手続きに関する文書から、現在とは違った寺院の役割について見てきました。先に見たように、江戸時代には全国に6万以上の村があり、それぞれの村で文書が作成されました。だから、現在でも江戸時代の古文書は膨大に残されており、未調査のものも数多くあります。

本文でとりあげた「宗門人別改帳」は、村で毎回同じものが2冊作成され、1冊は役所へ提出し、1冊は村で保管しました。役所へ提出された分は、現在ほとんど残っていないのですが、村で保管していた分は何十年分もまとめて残っているものがあります。「宗門人別改帳」には、住民の家族構成、各人の名前・年齢が記されており、今回見たように他所から村に移住する者があった場合や新たに村で子どもが生まれた場合にはその名前が書き加えられます。逆に村から他所へ転出する者があった場合や村で死者が出た場合には、その名前が削除されます。このため、過去の人口変動を研究する歴史人口学の素材として最適で、大いに活用されています。

例えば、速水融氏は奈良の東向北町と美濃国の西条村の人口動態を比較して、濃尾平野ではめったに死なない20～40代の人が奈良では比較的多く死んでいると指摘しています（『歴史人口学で見た日本』〔文春文庫、2001年〕）。では、どうしてこのような事が起こるのでしょうか？速水融氏は、この原因について都市の衛生問題を想定していますが、まだ十分に論証されているとは言えません。

このように1つの事実が明らかになると、さらなる疑問が生まれます。江戸時代の人々の暮らしについては検討すべきテーマが無数にあり、これを明らかにするためのヒントは古文書の中にあります。そして、我々の目の前には未だ紐解かれたことがない無数の古文書が横たわっているのです。

## 山形 隆司 (Yamagata Takashi)

---

1995年 大阪大学文学部卒業

1999年 関西大学大学院文学研究科博士前期課程修了  
(公財)元興寺文化財研究所、芦屋市立美術博物館、日本福祉大学知多半島総合研究所を経て、2017年奈良教育大学特任講師。



### 【研究テーマ】

江戸時代の庶民信仰に関心があり、研究を進めています。世界遺産になった富士山も江戸時代には信仰の対象となっており、たくさんの方が登っています。当時の記録を読むと、今以上に苦労して頂上まで登っていたことが分かります。大和国(現 奈良県)からも多くの方が富士山山頂を目指したことが、登山口の集落に残されている「道者帳」(休泊者名簿)から分かります。

### 【尊敬する人物】

田中正造(1841-1913)。小学生の時の文集に、「40歳くらいになったら田中正造のように世のために尽くしたいと思います」と書きましたが、未だ果たせていません。

### 【高校生のときに読んだ本】

駒井信二・寺尾善雄 編『中国故事物語(全3冊)』(河出文庫、1983年)。高校時代に購入して未だ手元にある文庫本。「余桃の罪」などは人情の機微をよく表現したものだと感じます。

---

## 江戸時代の古文書の魅力 —暮らしを探る—

---

著者 やまがた たかし  
山形 隆司

2018年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: [g-kenkyu@nara-edu.ac.jp](mailto:g-kenkyu@nara-edu.ac.jp)

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>